



2016.6.26



「気象コンパス」主宰

古川 武彦

台風発生が遅れ

日本の南の発生海域を「ひまわり画像（北半球）」＝図で眺めると、インドネシア方面に顕著なクラウドクラスターは見当たらないが、ずっと西方のインド洋上では白っぽく見えている。対流活動が盛んな証拠で、そこで上昇した空気の一部は東にも向かい、西太平洋域で下降し小笠原高気圧を強めている。

高気圧圏内では大気が安定し積乱雲が発達しにくいいため、クラスターも形成されず、台風も発生しない状況が続いている。このようにインド洋上の対流活動は日本の天候にも大きな影響を与える。

約2年にわたるエルニーニョはすでに終息したようだが、そんな年は台風の発生が遅れるという統計がある。いずれにしても南海上の対流が活発になると、台風1号につながるはずだ。（元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住）

6月24日現在、今年台風発生がゼロで、非常に珍しい。平年の発生数を見ると6月までで4個だ。このまま発生せずに今月が終わると1998年以来だ。

台風が発達するメカニズムはよく分かっているが、発生については未解明。有力な説は、低緯度地方で発生している個々の積乱雲が何らかの原因で大規模な雲の集団（クラウドクラスターと呼ばれる）として組織化される。するとクラスターの上空が凝結熱で暖まって軽くなり、地上気圧も下るので、周囲から風が吹き込み始め、弱い渦巻きが生まれる。台風の卵だ。しかしクラスターのすべてが卵になる訳ではない。



2016.7.3



「気象コンパス」主宰

古川 武彦

七夕

りや雨となる勘定。梅雨の晴れ間は非常に貴重だ。

梅雨空が続く早朝、カーテンから差し込む光に誘われて外に出ると、空ははげで掃いたような「巻雲」＝写真＝の乱舞。この雲は「上層雲」に属し、一般に7000mを超えるような高さで、気温はマイナス40～50度程度、すべて微細な氷粒できている。巻雲のほかに、魚のウロコのような「巻積雲」、薄い絹布のような「巻層雲」も上層雲の仲間だ。

夏至が過ぎて10日。今も太陽は南の海をどんどん暖め続けて高気圧を発達させている。南寄りの暖かい気流が前線を北に押し上げると梅雨明け。関東地方の平年は7月21日ごろだが、今年はどうなるだろうか。七夕が梅雨の晴れ間に恵まれることを祈りたい。

（元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住）

7日は七夕。天候に恵まれれば、中天に懸かる天の川を挟んで、織姫と彦星が1年ぶりに再会を果たすという舞台が仰げる。

関東地方の梅雨入りは6月5日ごろだったから、間もなく1カ月。西日本はたびたび大雨に見舞われているが、水戸では6月初めからの降水量は約80mmで、平年の143mmの半分ほどだ。

一方、平年の雨の降り方を見ると、0.5mm以上の日数は6月が13.3日、7月が12.5日で、これに曇天日数を加えると、月のほぼ半分が曇